

妊婦の自己決定支えて（高知新聞 2013 年 3 月 29 日）

（室月 淳）



NIPT にたいするいちばんおおきな誤解は、希望すればだれでも検査をうけられる、お金をだせばだれでも受検できるというものです。もちろん「指針」には検査の適応がしめされています。それはたとえば高齢妊娠であること、前児が染色体の病気であること、NT などの所見をみとめるときなどといったものです。しかしこれらのいずれかをみたとせばあとは無条件に検査をおこなう、かといえれば決してそんなことはありません。

「遺伝カウンセリング」が検査前、検査後に必須とされています。遺伝カウンセリングは「医療カウンセリング」のひとつですので、専門的知識にもとづいた医学的な説明は当然必要です。このばあい、染色体の病気の説明、個々人のリスクの評価、検査のメリットや限界、デメリットなどのわかりやすい説明は前提条件です。しかし「説明」はカウンセリングではありません。それでは「カウンセリング」とはいったいなにか？

たとえをあげてみます。45 歳で妊娠したかたがいるとします。これまでながく不妊であったのが、あるとき妊娠していることに気がついた。45 歳で自然妊娠することはもちろんめずらしいことですが、それでもそういうかたにはときどき遭遇します。もちろんご本人は天からのめぐみとしてここからよろこんでいます。しかし 45 歳であれば流産の頻度もたかく、またうまれてきたこどもが染色体の病気をもつ頻度は 30 分の 1 をこえるハイリスクです。こどもはぜひほしい。しかしもし染色体の病気をもつとすれば、自分たちがどこまでめんどろをみていけるか自信がない。そういう不安や逡巡をかかえて遺伝カウンセリングにくることになります。

実はここには、安心して染色体の病気のこをうむことができないという日本社会の問題もふくまれています。しかしカウンセリングでいくら社会問題を告発しても、現実をめまえにいるクライアントが直面している不安を解消することにはなりません。カウンセラーとクライアントのやりとりのなかで、現実的でもっとも妥当なみちすじをなんとかみつめていくことになります。

このときに出生前診断がひとつの選択肢としてあげられるかもしれません。従来ならば羊水検

査となりますが、羊水検査にはひくいとはいえ流産のリスクをとまいません。こんかいの妊娠自体が僥倖であり、そういったリスクにさらされること自体が心理的にたえがたい、そういうことはよくあります。そんなときにNIPTが有力な選択肢としてでてくるかもしれません。

NIPTはさまざまな問題をかかえています。あるひとたちにとっては倫理的に許容できない検査であるかもしれませんが、またべつの一ひとたちにとっては一種の福音であり、希望するひとたちにはできるかぎり提供しなければならないものと考えられています。しかしわれわれ遺伝カウンセラーは、この検査が本質的に是であるとか非であるという考え方はしません。NIPTをひろく普及させよう、あるいは逆に情報提供しないようにしよう、禁止しようとする態度はとらないのです。

われわれのめのまえにあるのはさまざまな状況におかれているクライアントの不安であり躊躇といった具体的な事情です。そんななかからすこしでも前向きな選択肢をかんがえ、それを提示し、そしてクライアントが自分たちで決断し選択していくのを、背中からそっとあとおしすること、それが遺伝カウンセリングの役割といえるかもしれません。

3月23日(土)に高知市・高知医療センターに招かれ、高知県周産期セミナーでお話をしてきました。タイトルは「無侵襲的出生前遺伝学的検査(NIPT)とはなにか?そしてどこに行くのか?」でした。そこでの講演内容を高知新聞に紹介していただきました。

4月からの検査施設認定、検査開始を直前にひかえた時期で、多くのかたがたが強い関心をいただいているのをはだで感じました。

高知新聞 2013年(平成25年)3月29日(金曜日)

新出生前診断 妊婦の自己決定支えて



高知市で周産期セミナー

新しい出生前診断「母おり、高齢妊娠や染色体体血胎児染色体検査」に異常の子どもの妊娠歴がついて考える県周産期センターがある妊婦らが対象。4月ミナーがこのほど、高知市池の高知医療センターで臨床研究が始まる見通で開かれた。宮城県立こども病院産科部長の窪月淳医師が講演し、「(検査を行う)臨床遺伝専門医には、妊婦や家族に十分説明した上で、自己決定を後押しする対応が求められる」と語った。

同検査は妊婦の血液に含まれるDNAを解析し、胎児のダウン症など3種類の染色体異常を調べ。日本産科婦人科学会が実施指針を策定して

同検査は「安易に広げれば命の選別につながる」と倫理上の問題が懸念される一方で、「検査を受ける権利を一学会が制限するのはおかしい」との声や、実施施設の条件緩和を求める声が上がっている。

窪月医師は国内の議論を踏まえた上で、実施の際には「インフォームドコンセント(十分な説明に基づく同意)」と、インフォームドチョイス(十分な説明に基づく選択)が必要と指摘。「妊婦が自発的に検査を受け、どんな選択をしても決して不利にならないよう、国や社会が支援に取り組まねばならない」と語った。

セミナーは高知医療再生機構の助成を受け、高知医療センターが主催。医師や助産師ら約50人が参加した。(四田朋三)

新出生前診断について解説し、「生命倫理について考え直すきっかけになれば」と語る窪月淳医師(高知市の高知医療センター)

ご感想ご意見などがありましたらぜひメールでお聞かせください
アドレスは murotsuki に yahoo.co.jp をつけたものです

[無侵襲的出生前遺伝学的検査 \(NIPT\)\(いわゆる新型出生前診断\) にもどる](#)

[室月研究室トップ にもどる](#)

[フロントページ にもどる](#)

カウンタ 446 (2013年3月29日より)